
criminals

意榎愁?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

c r i m i n a l s

【Nコード】

N 8 0 5 8 X

【作者名】

懣榎愁？

【あらすじ】

桔梗家の仕事は、表沙汰にできない、所謂裏の仕事であり、僕自身もその仕事をしている。僕自身、仕事を好んではないけれど、守るべき物があるから仕方が無い。まあ、分かっているのは僕ももう、戻れない。それだけだ。

1・陰鬱な朝（前書き）

なんだか最近、春と夏や秋と冬の区別がつかなくて夏と冬しかないように思えます。という訳で惓惓愁々です。日本ももしかしたら、夏と冬だけの国になるかもしれませんね。読んでくれれば幸いです。

1・陰鬱な朝

・五歳の頃にそれを悟った。・

「うい、キリ君おはよー」

と言ったのは、僕の親友、三代香奈^{みしろかな}。

「よう。今日も絶好調に能天気だな」

と言ったのは、僕こと桔梗霧^{ききょうきり}である。

僕と香奈は小学校からの仲で、中学、そして高校も同じなのであった。所謂、幼馴染みというやつだ。

「そうでもないよー。何といっても今日は大事な入学式があるからねー。陰鬱な気分なのだー」

「どうして、入学式が陰鬱になるんだ？」

僕は、香奈と入学式がどのように関係しているのかが分からず、思わず訊いてみてしまった。しかしながら、失言であった。

ぶー、と唇を尖らせる香奈。

怒ってはいない。こいつに怒るという概念は無いので、少し気に障っただけであろう。

「忘れたのー？私ほねー、生徒会長さんなのだよー。全校の前で話すのは、慣れないねー。億劫だよー」

そうだった。こいつは生徒会長なのだった。こんなに能気なもんだから、こちとらすっかり忘れていた。こんな語尾を『ー』を付けて伸ばす様な人間が生徒会長をやっついようとは、誰が思っただろうか。

実際、ここにいるんだけどさ。

しかも、香奈は成績優秀、運動神経も良く、料理や裁縫など家庭的なスキルも高いという、優等生中の優等生なのだ。能気さを除けば、だけどさ。

「なるほどね。それは陰鬱な気分にもなるよなあ」

「まーでも、今年もキリ君と同じクラスになれたのは、うれしーけどねー」

そういえば、そうだ。

小中高と、ずっと同じクラスだった。合計一年。人生の半分以上を、こいつと過ごしてきているのだった。同じクラスで。いつも隣にいた。

その事実は今も、腐れ縁では表せないような、それ以上の何かを感じさせてくれた。

でも、そんな恥ずかしい事を堂々と言うな！

こいつは、恥ずかしげも無くこういう事を言う。臆面も無く、こいつう事を言う。正直に、明け透けに、隠す必要が無いかのように言う。

だから僕は、お前を嫌いになれないんだ。僕と正反対で、僕には眩しすぎるのに、手なんか届くはずもないのに、諦めきれない。

僕に彼女の、平穏な日常を脅かす資格など、何処にもないというのに。僕に彼女の隣にいる権利など、何処にもないというのに。

「どーしたのかな、キリ君？もしかして、照れてるのー？」

凶星だった。結局のところ、照れているのだった。

感情的になるな、と教わって来た筈なのに。およそ三歳の頃から、そう教え込まれてきたはずなのに。

そんな教育も、こいつの前では無意味という事なのか。

「うるせえよ。照れてない。本当のところは、お前の方が照れてるんじゃないか？そんな恥ずかしい事を言ってさ」

照れるという、僕の行動を僕自身が認めたくなかったため、なんとか抵抗する。それに、自分だけ照れているというのも、なんだか気に入らなかつた。

「全然。たとえば、街の十字路。街の中でもっとも人口密度の高い場所。私はそこでも、恥じらいを一切感じずに、さっきみたいな事を言える」

そう、思うよー、と香奈は付け加えた。

全く持つて、無意味な抵抗だった。無意味な質問だった。

こいつが、恥ずかしいなんて気持ちを抱くわけが無かったんだ。照れるわけが無かったんだ。

そんなことは先ほど、僕が自分で言っただ事じゃないか。

無駄な抵抗をするな。この教えも、僕は破ってしまったらしい。

「悪かった。僕は照れてた。おまえが、あんな嬉しい事を言ってくれるとは思わなかった。だから、……それだけだ」

「うんうん」

満足そうに頷く、香奈だった。幼児が玩具を与えられた時の様な、そんな表情。

畜生、そんな顔をするなよ。

また、離れ辛くなっちまった。

「それじゃー、ちよつと行ってくるねー」

「……何処にだ？」

「言ったでしょー。生徒会長なのだー、私はねー。だから、朝早くから、生徒会室に行かねばならないのだー」

生徒会の仕事か。それなら仕方ない。人のやるべき事を奪ってまで、会話するような話題は僕には無かったし、僕のせいで香奈が叱咤されるのは、望ましい事ではなかった。

「いつてらっしゃい。ていうかとつと行け」

僕はそう言つて、手を振る。悔いが無いように、手を振った。

「大丈夫だよ」

突然、言われてしまったので驚いた。

何に驚いたのかわつて、そんなの決まっている。

「いなくなったり、しないから」

心を読まれた事に、だ。

香奈が教室からいなくなり、一人になってしまった。

教室にはたくさんのクラスメイトがいるというのに、僕は一人だ。隣にも前にも後ろにも、当然席はあつて、勿論人は座っているというのに、僕は一人だった。

香奈がいないと、僕は一人なのだった。昔から何も変わってはいなかった。小学生から何も変わって無かった。

一人は、嫌いではないが、好きでもなかった。

そこを、読まれてしまった。悔いが無いように、手を振ったつもりだったのにな。くそ、あいつは本当にすごい奴だ。

僕は、左手首に巻いたリストバンドを見る。黒の生地に、赤い文字で『Dead or Arrive』と綴ってある。僕が巻くには、ピッタリのリストバンドだった。

これは外せない。

なぜなら、リストバンドの向こう側。僕の左手首には、ある印が入っているから。

一生消えない、契約の印。僕が、人ではなくなった印。僕が、人という存在から下落した証。限らない『異』の証明。

うち。全く碌でもない。格好良く言うんじゃない。こんなのは『糞ったれの証』で十分だ。

はあ、と僕はため息を吐く。

晴れた天気が、僕の心を焼き付けた。

まるで。

「まるで、太陽まで敵にした気分だよ。僕の気分も陰鬱だ」
入学式当日の朝は、死ぬほど気分が悪かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8058x/>

criminals

2011年10月22日06時14分発行